



人間牧場主・年輪塾々長
若松 進一

何を求める 風の中ゆく

もう十七、十八年も前、東京で開かれた研修会後の交流会で都会の人から「あなたの町の人口は何人ですか?」と尋ねられました。当時はまだそれほど都会の人口問題が深刻でない時代だったので、過疎に悩む田舎の私たちを見下すようなその言葉にムツとした私は、思わず「はい私の町の人口は五十五万六千人です」と答えてしまいました。あつげにとられたその人は、愛媛県庁所在地である松山市の人口が、当時五十万人程度だったことを知っていて、「えっ、松山市をしのぐ人口の町がまだ愛媛県にあるのですか?」といぶかしく聞き返しました。私はすかさず「私の町の定住人口は六千人です。しかし夕日のメッカふたみシーサイド公園には、年間五十五万人の人がやって来ます。つまり定住人口6千人+

交流人口五十五万人⇨五十五万六千人です」とハツタリをかました思い出は、今も忘れることはできません。

【物語づくり】

じゃあ観光客ゼロに等しかった、地元の人さえ「何にもない」と思っていた、不便極まりなく何の変哲もないわが町へ、何を求めて人が集まって来るようになったのでしょうか。その理由は色々ありますが、一番は何といっても「物語の存在」です。田舎に住む人は自分の町が自然豊かだとよく自慢します。確かに田舎の自然は豊かですが、豊かな自然だけで人が集まるほど甘いものではありません。民俗学者の宮本常一が言っているように「人の思いが加わらなければ自然は淋しいもの」で、豊かな自然に人の思いを付加して物語をつくり情報発信しなければならぬのです。双海町は物語の主役をどこにでもある夕日にしました。そして、「夕日のことだったら双海町に聞け」と言われるほど夕日に徹底的にこだわり、夕やけコンサートを皮切りに様々な物語をつくりました。「何事も十年経ければ物語りになる」といわれるほど夕日の物語を作るのには長い時間を要しましたが、他の市町村を見習わないオンリーワンのこだわりと継続が、大きな結

果を生んだのです。

【交流の拠点づくり】

しかし幾ら物語ができてイベントの開催や情報の発信ができて、それは一過性で経済効果に結びつきにくく、熱しやすく冷めやすい田舎の熱を持続したり交流に結びつけることはできないのです。そこで考え付いたのが「交流の拠点」づくりです。車の普及や高速道路網が発達して便利になると、人々は更なる快楽を求めてより遠くへとうごめきます。私たちは「通過する町から立ち止まる町へ」のスローガンを実践すべく、三つの交流拠点を造る計画に着手しました。中でもふたみシーサイド公園は今でこそ他の類似施設ができて多少色あせていますが、当時は画期的な道の駅として注目を集めました。休憩機能・情報発信機能・交流機能の三つを合わせ持ち、夕日の物語に出会える場所として、また地域特産品を製造販売して経済効果を高める等、目論見どおりこの変化の激しい時代に、二十一年間にわたって存分の働きをしたのです。交流の拠点を造るには道路的に利用しやすく、ドキドキ・ワクワク・ジーンとくるような物語を体感できる癒しの空間がなければなりません。さらに点と点を線で結ぶ次への期待も必要です。

「人の魅力づくり」

地域づくりは行き着くところ人の存在が最も重要です。「物語」があつて「拠点」があつても、人の想いが加わらないと何の魅力もなく人は集まって来ません。かつて私はまちづくりを始めた頃、人がやって来るのはテーマパークのようにき



らびやかなものだとはかり思っていました。確かにそのようなものに魅せられる人もいますが、資金力のない地域が輝くには、そこにしかないオンリーワンで勝負するしかないのです。活き活きと町が輝いている所には、必ずいぶし銀のような輝きを持った人がいることに気づき、

どうすれば自分もそのようなキーマンになれるか、魅力ある人の条件を色々考え、近づけるよう努力してきました。残念ながら未だ理想の人にはなり得ていませんし、町から一時間圏内に県庁所在地松山や観光地内子・大洲などがあつて、おこぼれやついでの恩恵に浴しています。それでも物語と拠点と人の魅力を追い求め続けた結果、観光客ゼロに等しかったわが町に、多くの人が訪れてくれるようになりました。

はてさて、私の考える魅力ある人の条件とは一体どんなものだろうと考えてみました。

- ①人と違った個性を持った人
- ②ユーモアがある人
- ③地域を愛する人
- ④トークがうまい人
- ⑤経済と人を動かす行動力のある人

- ⑥謙虚さと冒険心を持った人
 - ⑦夢がある人
 - ⑧知恵的文化を持った人
 - ⑨情報受・発信力のある人
 - ⑩ぶれない人
- こう述べてみると、いかに私が魅力のない人間であるかが分り落胆せざるを得ませんが、自分に持ち合わせていなくても、これからの人づくりはこういう条件を持った人を沢山つくることも目指さなければならぬようです。いつの時代にも最後は「本物と真心」のようです。松山ゆかりの放浪の自由律詩俳人種田山頭火の一句に「何を求める 風の中ゆく」というのがあります。どうやら人は風と土、それに人を求めてうごめくようです。

「人何を 求め地域に やつて来る
色々あるが 結局人かも」
「魅力ある 人になろうと 頑張るが
何年経つても 未だ叶わず」
「ああそうだ あの人会おう 思う人
そんな理想の 人になりたい」
「山頭火 『何を求める 風の中ゆく』
この句はやはり けだし名言」
(若松進一笑売啖呵より)